

## クラシック音楽講座

### 第8講 中期ロマン派～国民楽派

ショパン リスト チャイコフスキー ロシア五人組 スメタナ ドヴォルジャーク グリーク

講師：佐藤卓史

2024年2月4日（日） 小手指公民館分館

ベートーヴェンの後継たらんとして分裂していったドイツ・ロマン派。  
その文脈の中に、周辺の国々で音楽を志す作曲家たちも呑み込まれていく。  
民族の誇りと苦難の歴史が、彼らの創作の原動力だった。

【ドイツ・ロマン派の作曲家たち】※前々回・前回のおさらい

開拓者**シューベルト**(1797~1828) 体现者**シューマン**(1810~1856) 分裂の火種**メンデルスゾーン**(1809~1847)  
進歩派**リスト**(1811~1886)+**ヴァーグナー**(1813~1883)+**ブルックナー**(1824~1896)  
VS 保守派**ブラームス**(1833~1897)+批評家**ハンスリック**(1825~1904)

【**ヴィルトゥオーゾ**の時代】

作曲と演奏に専門が分化。超絶技巧で大衆の人気を集める名人演奏家**ヴィルトゥオーゾ virtuoso** が出現した。  
ヴァイオリンでは**パガニーニ**(1782~1840)を筆頭に**シュポーア**(1784~1859)、**エルンスト**(1814~1865)、**ヴェータン**(1820~1881)、**ヨアヒム**(1831~1907)、**ヴィニャフスキ**(1835~1880)、**サラサーテ**(1844~1908)、**アウアー**(1845~1930)ら。ピアノでは**クラマー**(1771~1858)、**フンメル**(1778~1837)、**カルクブレンナー**(1785~1849)、**モシェレス**(1794~1870)、**タールベルク**(1812~1871)らが活躍。

**フレデリック・フランソワ (フリデリク・フランシチェク)・ショパン**

(1810.3.1.? ワルシャワ近郊ジェラゾヴァ・ヴォラ~1849.10.19. パリ)

《概要》ワルシャワ音楽院卒業後の演奏旅行の最中に祖国で革命（ワルシャワ 11月蜂起）が失敗し、父の故国フランスの**パリへ亡命**。サロンで活躍し、恋人サンドの領地ノアンとパリを往来。作品の大部分は**ピアノ独奏曲**で、優美で洗練された趣味、古典指向、革新的な書法、非西欧的感性が融合した孤高の境地を築く。ロマン派ピアノ曲に絶大な影響を与え“**ピアノの詩人**”と称される。帰郷の願い叶わず 39歳で肺結核のため死去。

《キーワード》「諸君、脱帽したまえ。天才だ」 **シューマン**が同い年の**ショパン**の作品を紹介した評論の一節。  
**ショパン**はピアノも作曲もほぼ独学であり、独自のピアノ書法や演奏技巧の由来は謎に包まれている。

**プレイエル** 1807年創業のフランスのピアノメーカー。同業のエラールと鎬を削ったが、**ショパン**は**プレイエル**を愛奏し、「調子の悪い日はエラールを弾く。いつでも良い音で鳴ってくれるから。でも調子の良い日、プレイエルを弾くと、僕の音がする」と語った。演奏会場**サル・プレイエル**では**ショパン**のパリでの最初と最後のリサイタルを開催。独特の甘やかで繊細な音色が特徴だったが 20世紀半ばに経営困難に陥り、現在は操業停止中。

**遺作** **ショパン**は遺言で未出版作品の破棄を望んだが、死後友人たちが協議して不履行と決し、次々と未発表の作品が刊行された。これらは **Opus posthume**（死後出版の作品＝遺作）と呼ばれ、**ショパン**の全作品の約半数を占める。**ショパン**の「遺作」は必ずしも晩年の作品ではなく、多くはワルシャワ時代（10代）の作品。

《主要作品》大部分がピアノ曲・**絶対音楽**（標題を持たない）

〈多楽章ソナタ〉**ピアノ協奏曲**（2曲）、**ピアノ・ソナタ**（3曲）、**チェロ・ソナタ Op.65**

〈大規模曲集〉**24の前奏曲 Op.28** ※バッハ「平均律」と同じく全調を網羅

**12の練習曲 Op.10**、**12の練習曲 Op.25** ※全く新しい演奏技巧の追求

〈中規模小品〉**バラード**（4曲）[譜例1]、**スケルツォ**（4曲）、**幻想曲 Op.49**、**舟歌 Op.60** [譜例2]

〈サロン小品〉 **即興曲** (4 曲)、**夜想曲** (ノクターン) (19 曲 +  $\alpha$ ) [譜例 3]、**ワルツ** (14 曲 +  $\alpha$ )  
〈民俗舞曲〉 **ポロネーズ** (16 曲 +  $\alpha$ )、**マズルカ** (51 曲 +  $\alpha$ ) ※国民楽派の趨り

### 【国民楽派】 = 民族主義ロマン派

**民族主義 (ナショナリズム)** …フランス革命～第 1 次大戦の間の時期に、「民族の美と清浄とを追求するロマン主義的な民衆運動」。ヘルダー(1744~1803)の「民族精神 Volksgeist」の概念を思想的基盤とする。

「ナショナリズムの音楽」としての国民楽派は**民俗音楽 (フォルクローア) の引用・模倣**として始まり、中央視点では**エキゾティシズム (異国趣味)**の一部と捉えられた。ゲルナー(1925~1995)は「新しい高文化の創造のための民俗文化の利用」を見抜き「伝統を捏造する」本質的性格を喝破。

国民楽派の作曲家たちは、「民族(民俗)的/非民族(民俗)的」の枠組みの中で、ドイツ・ロマン派の「進歩派/保守派」と同様の対立に陥り、やがて単純なフォルクローアの引用は行き詰まりを見せるようになる。

**フランツ・リスト** (1811.10.22. ドボルヤーン (現ライディング) ~1886.7.31. バイロイト)

《概要》 史上最大のピアノ界のスター、“**鍵盤の魔術師**”。少年期にウィーンでチェルニーに短期間師事した他は独学で驚異の演奏技巧を習得。パリのサロンの寵児となり数多くの音楽家、文化人、王族貴族らと交流。しかし 35 歳で演奏活動から退きヴァイマル宮廷楽長に就任、**作曲に専念**。主要作品の大半はこの時期以降に作曲/改訂されている。50 代で**聖職者**となり、神秘的・思索的な作風に転じる。生涯を通じて形式と和声の新奇性への興味を失わず、常に**新時代の音楽**を模索した。

《主要作品》 “**標題音楽**”派の代表者 (ショパンと対照的)

**ハンガリー狂詩曲** (15 曲 +  $\alpha$ ) [譜例 4・5]…ドイツ系の出自でハンガリー語話者ではないリストが「ハンガリーの音楽」として紹介したのは実際には**ロマ (ジプシー)**の音楽であり、そのフォルクローアの引用だった。当時から疑問・批判の声もあったがリストの絶大な影響力から誤解が広まり、その解消には相当の時間を要した。

**パガニーニによる大練習曲** (6 曲) …青年期にパガニーニに心酔しヴィルトゥオーゾの道を目指したリスト。6 曲中 5 曲はパガニーニの代表作「24 のカプリス」Op.1 からの編曲で、残る 1 曲 (『ラ・カンパネラ』) [譜例 6]はヴァイオリン協奏曲第 2 番の終楽章の編曲。

**愛の夢** (3 曲) [譜例 7]…「愛」をテーマにした自作歌曲 3 曲のピアノ独奏用編曲。中でも第 3 番 (原曲『おお、愛しうる限り愛せ』) は有名。リストの**編曲者**としての本分が発揮されている。

### 【ロシアの作曲家たち】

“ロシア近代音楽の父”**ミハイル・グリンカ**(1804~1857)の民族主義オペラ (代表作『ルスランとリュドミラ』) に影響を受けた次世代が「**ロシア五人組**」を結成、“**民族派**”を確立。

《ロシア五人組》リーダー (バラキレフ) 以外**アマチュア**出身

**ミリイ・バラキレフ** (1837~1910) 無料音楽学校創設 『イスラメイ』

**セザール・キュイ** (1835~1918) 堡壘建築家

**モデスト・ムソルグスキー** (1839~1881) 官吏 組曲『**展覧会の絵**』、交響詩『**禿山の一夜**』

**アレクサンドル・ボロディン** (1833~1887) 化学者 歌劇『**イーゴリ公**』、『**中央アジアの草原にて**』

**ニコライ・リムスキー＝コルサコフ** (1844~1908) 海軍軍人 交響組曲『**シェヘラザード**』 Op.35

《西欧派》一方、西欧で専門教育を受けキャリアを築いた**アントン**(1829~1894)と**ニコライ**(1835~1881)の**ルビンシテイン兄弟**が帰国、音楽教育の重要性を説きそれぞれペテルブルク音楽院(1862)、モスクワ音楽院(1866)を設立。ヨーロッパの伝統的・アカデミックな音楽の習熟を目指し“**西欧派**”と称された。

### ・民族派

“ロシア五人組”（バラキレフら）  
民族主義 フォルクローア  
アマチュアリズム  
革新派

対立

### ・西欧派

ルビンシテイン兄弟、チャイコフスキー  
伝統主義 西欧至上主義  
アカデミズム  
保守派

**ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー** (1840.5.7. ヴォトキンスク～1893.11.6. ペテルブルク)

《概要》19世紀ロシアを代表する国際的作曲家。法律学校を卒業し法務省の役人となるが、作曲を志し離職。ペテルブルク音楽院の1期生として卒業後、モスクワ音楽院の教授に招聘される。国外にも頻繁に赴き名声を確立するもキャリア絶頂期に急死、さまざまな憶測を呼んだ。大規模作品に傑作が多く、甘美・雄大な旋律線、感傷的なムード、明確なドラマ性、ほのかな民族的色彩により、特にわが国では人気が高い。

《キーワード》**史上初** 高等教育修了後に専門音楽教育を受けた初めての作曲家であり、ロシア国内だけで専門音楽教育を修了した初めての作曲家。当時のロシアの音楽環境の遅れには宗教的な背景も指摘されている。

**同性愛者** 女性ファンから熱烈な求婚を受け一度は結婚するが80日後に離婚。悲劇的な内容の交響曲第6番『悲愴』初演直後の急死について、性的指向に悩んでの自殺説、貴人との同性愛関係の露見による暗殺・賜死説も飛び交ったが、現在の研究ではすべて否定されている。公式の死因はコレラ。

**メック夫人** 鉄道富豪の未亡人で音楽愛好家の**ナジェジダ・フォン・メック**(1831～1894)はチャイコフスキーの才能に心酔し年間6000ルーブル（現在の日本円で約1500万円）の資金援助を申し出た。これにより作曲家は教職から解放され、国外進出の機会を得る。しかし二人は一度も面会せず、**文通**するだけの奇妙な関係が14年も続いた。メックの経済的逼迫によりパトロン関係は解消されるが、作曲家の後を追うように死去。若き**ドビュッシー**も一時期メック家の音楽教師を務めていたが、娘に手を出して解雇されたといわれる。

《主要作品》

〈オペラ〉

- ・エフゲニー・オネーギン Op.24 (1878)
- ・スペードの女王 Op.68 (1890)

〈バレエ音楽〉（“**三大バレエ音楽**”）※作曲者の職人気質が発揮

- ・**白鳥の湖** Op.20 (1875-76)
- ・**眠れる森の美女** Op.66 (1888-89)
- ・**くるみ割り人形** Op.71 (1891-92)

〈管弦楽曲〉

- ・**交響曲 第4番 へ短調 Op.36** (1877-78)
- ・**交響曲 第5番 ホ短調 Op.64** (1888)
- ・**交響曲 第6番 口短調 Op.74** 「悲愴」 (1893)
- ・幻想序曲「ロメオとジュリエット」 (1869-80)
- ・イタリア奇想曲 Op.45 (1880)
- ・**弦楽セレナーデ ハ長調 Op.48** (1880)
- ・**序曲「1812年」 Op.49** (1880)

〈協奏曲〉

- ・**ピアノ協奏曲 第1番 変口短調 Op.23** (1874-75)
- ・**ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op.33** (チェロ+管弦楽) (1877)
- ・**ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.35** (1878)

〈室内楽曲〉

- ・弦楽四重奏曲 第1番 ニ長調 Op.11 (1871) ※第2楽章「アンダンテ・カンタービレ」が有名
  - ・ピアノ三重奏曲 イ短調 Op.50「ある偉大な芸術家の思い出に」(1882) ※ニコライ・ルビンシテインの追悼
- 〈ピアノ曲〉
- ・四季—12の性格的描写 Op.37a (1875-1876)

《その後のロシア音楽界》“五人組”最年少の**リムスキー＝コルサコフ**はペテルブルク音楽院の教授に抜擢されアカデミズム派に鞍替え、「管弦楽法」を著し第一人者に。門下からは後に「ベリヤーエフ・サークル」の同僚となる**グラズノフ**(1865~1936)や**リャードフ**(1855~1914)、さらには**ストラヴィンスキー**(1882~1971)、**プロコフィエフ**(1891~1953)が輩出。また後にチャイコフスキーに私淑する**アレンスキー**の門下からは**ラフマニノフ**(1873~1943)や**スクリャービン**(1872~1915)が育ち、ロシア音楽の伝統は揺るぎないものになった。

【チェコの作曲家たち】

**ベドルジハ（ベドジフ）・スメタナ** (1824.3.2. リトミシュル~1884.5.12. プラハ)

《概要》リストに憧れてピアニストを目指し、スウェーデンのヨーテボリでキャリアを築く。プラハ仮劇場設立にあたりチェコオペラの創作を構想。第2作『売られた花嫁』で成功し仮劇場の首席指揮者の地位を得るが、対立する保守層から「ヴァーグナー主義」と批判される。50歳で**聴力**を失ってからも旺盛な創作を続けたが10年後に精神病院で死去。「チェコ近代音楽の父」と認められたのは死後しばらく経ってからのことだった。

《主要作品》

- 〈オペラ〉『ボヘミアのブランデンブルク人』(1862) 『**売られた花嫁**』(1863) 『ダリボル』(1867)他
- 〈交響詩〉**連作交響詩『わが祖国』**(6曲)(1874-79)
- 〈室内楽曲〉弦楽四重奏曲 第1番『わが生涯より』(1876)

**アントニン・ドヴォルジャーク** (1841.9.8. ネラホゼヴェス~1904.5.1. プラハ)

《概要》プラハ仮劇場のヴィオラ奏者としてスタート。オーストリア政府奨学金に応募した『モラヴィア二重唱曲集』(1877)でブラームスに認められる。出版社ジムロックの求めに応じて作曲した『**スラヴ舞曲集**』が爆発的ヒット。チェコ各地の民俗音楽に根ざす美しい旋律をふんだんに用いた器楽曲で国際的な名声を博す。**ニューヨーク・ナショナル音楽院**より院長就任の打診を受け、1892年渡米。同地で**交響曲第9番『新世界より』**を含む円熟期の代表作を完成させ、新大陸(ネイティブアメリカン・黒人)の音楽と故国チェコの民謡に共通点を見いだす。帰国後はオーストリア帝国芸術科学勲章、プラハ音楽院院長などさまざまな栄誉に浴した。

《キーワード》**五音音階(ペンタトニック)** 通常の七音音階の第4音・第7音を省いた五音音階は世界各地の民俗音楽に共通し、日本では「ヨナ抜き」と呼ばれる。ドヴォルジャークは五音音階を基調とする素材でチェコの民俗色を表現、国際的な共感を得たが、渡米後これがチェコ固有の特徴ではないことに気づく。

《主要作品》

〈交響曲〉

- ・**交響曲 第8番 ト長調 Op.88** (1889)
- ・**交響曲 第9番 ホ短調 Op.95「新世界より」** (1893) [譜例8~12]

〈協奏曲〉

- ・ヴァイオリン協奏曲 イ短調 Op.53 (1879-82)
- ・**チェロ協奏曲 口短調 Op.104** (1894-95)

〈室内楽曲〉

- ・ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.81 (1887)

- ・弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 Op.96 「アメリカ」(1893)
- ・ピアノ三重奏曲 第4番 ホ短調 Op.90 「ドゥムキー」(1890-91)
- ・スラヴ舞曲集 第1集 Op.46 (1878)
- ・スラヴ舞曲集 第2集 Op.72 (1886)
- 〈ピアノ曲〉
- ・8つのユーモレスク Op.101 (1894)
- 〈歌曲〉
- ・わが母の教え給いし歌 Op.55-4 (1880)
- 〈オペラ〉
- ・ルサルカ Op.114 (1900)

《その後のチェコ音楽界》ボヘミア出身のスメタナ、ドヴォルジャークに対し、東部モラヴィア出身の**レオシュ・ヤナーチェク**(1854~1928)が出現しチェコ音楽を牽引。より緻密な民俗素材の用法を模索、民族主義と近代音楽の接点を見出す。スメタナ対ドヴォルジャーク論争に終止符を打った。

### 【北欧の作曲家たち】

**エドヴァルド・グリーグ** (1843.6.15. ベルゲン~1907.6.4. ベルゲン)

《概要》ヴァイオリニストのオーレ・ブルの勧めでライプツィヒ音楽院に留学。デンマークで**ニルス・ゲーゼ**(1817~1890)に師事し、北欧の民俗音楽に根ざした作曲技法に開眼する。リストに絶賛された「ピアノ協奏曲」、イプセンの戯曲への付随音楽『パール・ギュント』で**ノルウェーの国民的作曲家**の地位を確立。クリスチャニア(オスロ)やベルゲンのオーケストラの指揮者を歴任、ピアニストとしても国際的に活躍。次第に大作よりも小品や歌曲(妻は声楽家)の創作に重心を移し、特に抒情的なピアノ作品から“**北欧のショパン**”と呼ばれた。

《キーワード》**トルドハウゲン** 政府年金を得て生活が安定したグリーグは故郷**ベルゲン**の郊外の丘にトルドハウゲンという小さな一軒家を建て、妻と二人で慎ましく暮らした。この生活スタイルはシベリウス(『アイノラ』)やラフマニノフ(『セナール』)にも影響を与えた。

《主要作品》代表作は初期に集中

- ・ピアノ協奏曲 **イ短調 Op.16**
- ・付随音楽「パール・ギュント」**Op.23** (→第1組曲 **Op.46**、第2組曲 **Op.55**)
- ・組曲「ホルベアの時代から」Op.40
- ・抒情小曲集(全10集・66曲) **[譜例13]**
- ・ヴァイオリン・ソナタ 全3曲 (Op.8,13,45)
- ・「君を愛す」Op.5-3、「春」Op.33-2などの多数の歌曲

《その後の北欧音楽界》ノルウェーでは**クリスティアン・シンディング**(1856~1941)がグリーグの後継者と目された。デンマークでは**カール・ニールセン**(1865~1931)が独自の作曲様式を模索、またロシアの圧政に苦しむフィンランドでは**ジャン・シベリウス**(1865~1957)が民族主義的な交響曲・交響詩で国際的な人気を博す。スウェーデンでは**ヴィルヘルム・ステンハンマル**(1871~1927)や**ヒューゴ・アルヴェーン**(1872~1960)らが活動した。

停滞するドイツ音楽界に代わり躍動し始めた周辺国。スペイン、イギリスでも国民音楽が始まる。一方で革命の大混乱を乗り越えたフランスでは全く新しい潮流が出現しようとしていた。

譜例1 ショパン：バラード 第1番 新奇的な序奏、特に第7小節の解決されない不協和音は当時誤記あるいは誤植と考えられた。

譜例2 ショパン：舟歌（序奏） 属九の和音がペダルの中で揺らめくように変化していく。水面に乱反射する光の描写。

譜例3 ショパン：夜想曲第1番 左手の幅広い分散和音、右手の拍節を逸脱した自由な歌い回しは夜想曲の先駆者フィールドの様式を大きく越える。愛好していたベッリーニらのイタリア・オペラのコラトゥーラ・アリアに旋律の原型を見る考え方も。

譜例4 リスト：ハンガリー狂詩曲第2番より 「ラッサン」の標記がチャルダッシュの前身ヴェルブンコシュの様式を物語る。

LASSAN *f molto espressivo*

9 Andante mesto

*l'accompagnamento pesante e f*

譜例5 同上 急速な「フリスカ」部より。有名な主題は既存のロマの旋律の引用で、他のさまざまな作品にも登場する。

314

*p e sempre stacc.*

譜例6 リスト：パガニーニ大練習曲第3番「ラ・カンパネラ」 鈴の音を模した序奏、Allegretto という速度指示にも注目。

Allegretto

8

*p*

*p ma sempre ben marcato il tema*

6 8 41 48

譜例7 リスト：愛の夢第3番 自作歌曲の自由な編曲。中声の歌唱声部は両手で分担。原曲よりも演奏頻度は高い。

Poco allegro, con affetto

*dolce cantando*

譜例8 ドヴォルジャーク：交響曲第9番（ゲテュスによるピアノ編）～第1楽章第1主題

譜例9 同第1楽章副次主題 自然短音階の使用

譜例10 同第1楽章第2主題 五音音階を基調にした旋律

譜例11 同第2楽章主要主題 有名な「家路」の旋律。やはり五音音階が基調。

譜例12 同第4楽章終結部 これまでの全楽章のモチーフが登場し大団円を迎える。

譜例13 グリーグ：叙情小曲集より「ノルスク」Op.12-6 左手の執拗な5度重音（ドローン）は民俗楽器の模倣。ショパンのマズルカ等と共通する特徴。